

都市と周辺の華やかな陶磁器 (古代編)

市内では建設・土木工事などで遺跡が破壊されるため、頻繁に事前の発掘調査が行われています。皆さんも買物や散歩の途中で発掘調査の現場を見た事があるかと思います。遺跡を興味深く見ながら茶碗の破片ばかりで貴重なものと思えないという話も時々聞こえます。そこで、今回は条坊跡107次調査で発掘された破片から平安時代の都市生活を研究してみましょう。

奈良・平安時代の大宰府は、条坊制により東西南北の約2km四方の範囲に整然とした都市計画が行われ、条坊中心の南北軸には、幅36mの大きな道路(朱雀大路)がつくられました。条坊の北側は太宰府市にあたり、政庁跡、観世音寺など政治・宗教の中核施設が密集し、これらの周辺には当時の上位ポストの官人が住んだと考えられます。条坊の南側は筑紫野市にあたり、各階層の住人が住んでいたことでしょう。条坊跡107次調査は政庁跡から朱雀大路を南に約1.1km下った位置にあたり、朱雀大路に面した宅地の一部が解明されました。政庁からかなり離れた位置ですが、その出土品を細かく見ると、ここの住人は一般のクラスではなく官人クラスに相当する事がわかりました。

出土品の中では、貿易陶磁(中国製品)と国内

で畿内・東海・長門から運ばれた陶器がポイントとなります。国内産の釉を掛けた陶器は、中国産の高級品に近づこうとした国産ハイテク製品です。写真にあげたように、条坊跡107次調査の陶磁器は小さな破片が殆どで完全な形をイメージしづらいのですが、これを鑑定すると参考例であげた形になります。1~10は中国の輸入陶磁器で、1・2は白磁(河北省産)の椀・鉢、3・4・5・6・8は越州窯系青磁(浙江省)の小椀(蓋)・坏または皿・大型椀・花形の椀・壺などの蓋、7はやや粗製の青磁(福建省北部)の椀、9・10は長沙窯(湖南省)の黄釉褐彩・褐釉陶器の水注です。11~17は国産陶磁器です。11・12は長門産の緑釉緑彩の水注・白釉緑彩の蓋、13・14は京都産の緑釉の皿、15は東海産の緑釉の香炉蓋か、16・17は東海産の灰釉の皿・壺類です。なお、本紙裏面写真の番号につけた○印は形がほぼまちがいないもの、△印は他の形の可能性もあるものです。

条坊跡107次調査の注目すべき成果の一つとして、SE9井戸跡から白磁・越州窯系青磁・福建省北部の青磁・長沙窯陶磁の産地の異なる貿易品、長門・東海産の国産品が一挙に出土した事です。こうした贅沢品をそろえることのできる人物は、かなり



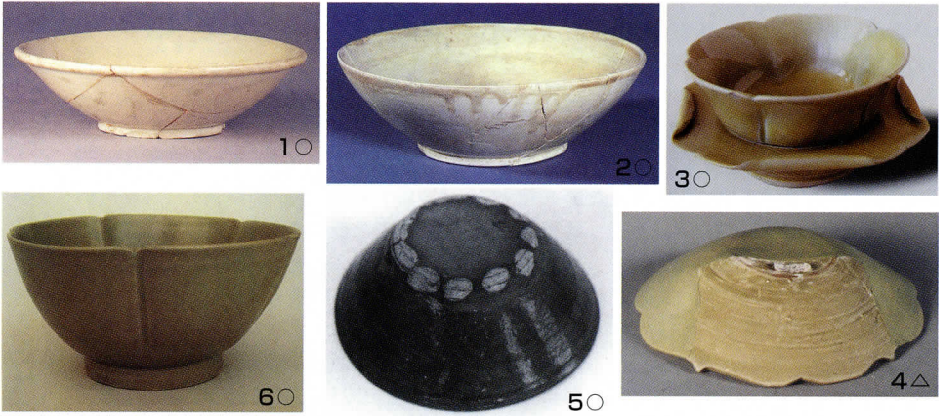
大宰府条坊跡第107次調査出土の陶磁器

上位の身分と思われます。また、このことにより政庁から遠く離れても、朱雀大路に面した宅地には上位階層が住み、公的な管理制限のあった貿易品は、財力に応じて私的に入手した事もわかりました。

さて、どうでしたか。自分達の身近に散らばる小さな焼物の破片には、海外産の華やかな貴重品や国内の先端技術を投入した高級品などもあったことは驚きでしょう。考古学の発掘調査は、このような小さな資料から当時の生活や社会経済の様子を明らかにする大切な作業なのです。(山本信夫)

参考例の写真は下記文献による。
 福岡市教育委員会「徳永遺跡」
 九州歴史資料館「大宰府」
 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
 「奈良・平安の中国陶磁」
 平凡社「中国の陶磁4」
 至文堂「日本の美術235」「同408」
 林士民「青磁と越窯」
 芸術家出版社「漢唐陶磁大全」

参考例



貿易陶磁器



国産陶磁器